# コロナ禍の夫婦の子育てと精神的健康
## ―生態学的多水準システムを視野に入れて―

加　藤　道　代　・　神　谷　哲　司
（東北大学名誉教授）　（東北大学大学院教育学研究科）

### 問題と目的

2020年３月以降、新型コロナウイルス感染症の拡大により、社会は急速な変化に見舞われた。児童・生徒の一斉臨時休校、外出やイベントの自粛、施設の使用制限などが相次いだ。企業においてもさまざまな動きがみられ、従業員に対する時差通勤やテレワークの推奨、在宅勤務措置のほか、特別休暇制度の活用も行われた。一方、多くの中小企業では、時差通勤やテレワークが現実的ではない面もあり、休業要請への対処、消費活動の低迷等も加わり、新型コロナウイルス感染症拡大による経済的打撃は甚大なものとなっている。

新型コロナウイルス対策特措法に基づいて出された1回目の「緊急事態宣言」は、地域による多少の差異はあるものの、最終的には、５月25日までの約１ヶ月半継続された。しかし、解除後も感染リスクが無くなったわけではないことから、行動の自粛や制限は引き続き求められ、他者との物理的距離を確保する、所謂「3密（密閉・密集・密接）の回避」「ソーシャル・ディスタンス」が推奨された。

では、これとは逆に、子どもの休校や親の在宅勤務により外出が回避され、余暇や娯楽についても「ステイ・ホーム」が求められ、むしろ普段以上に長時間寄り集まることになった家族、とりわけ密接なケア行動が中心の子育て家庭はどのような影響を受けたのだろうか。この点については、家族が家にいることによる家事やケアの負担や（高橋、2020）、子育てをしながら仕事をする困難によるイライラ（朝日新聞社、2020）の増大のほか、仕事上の対面コミュニケーションが難しいためのストレスなどが指摘されている（原ほか、2020）。

コロナ禍により、国家、地域社会などから発せられた行動基準が家庭に与える影響を理解するには、生態学的システム理論の枠組みが有効である。Bronfenbrennerは、環境をマイクロシステム、メゾシステム、エクソシステム、マクロシステムという４つの多水準システムによってとらえ、個人と環境が相互に関連しあうことを説明している（Bronfenbrenner、1977、1979磯貝訳1996）。このうちマイクロシステムは、家庭、学校など、直接的な経験によって発達する生活環境があてはまる。メゾシステムは、「家庭と職場」「家庭と学校」など２つ以上の異なるマイクロシステムの間の相互関係である。エクソシステムは、当人が属していない場からの影響が及ぶ関係である。さらにこれら３システムの上位には、地域社会、国家や、そこに機能する規範、文化などのマクロシステムが想定されている。

先に指摘された「子育てをしながら仕事をする困難」を生態学的システムから考えると、家庭と職場というメゾシステム関係において、一方のストレスが溢れ出し他方へ持ち込まれているととらえることができる。このような現象はスピルオーバーと呼ばれ、「一方の領域の役割状況や経験が、他方の領域の役割状況や経験に影響を与えること」（Crouter,1984）と定義されている。国内の先行研究においても、スピルオーバーは共働き夫婦のストレスに影響することが示されており（福丸、2003；小泉・菅原・北村、2001；黒澤、2014）、家庭役割と仕事役割という多重役割が共働き夫婦に与える影響を理解するために用いられてきた。特に福丸（2003）は、スピルオーバーの影響方向には、職場から家庭および家庭から職場の双方向があること、影響内容にはネガティブとポジティブな両側面があること、働く母親だけでなく父親もスピルオーバーの影響を受けていることを指摘している。

ただし、スピルオーバー概念を用いて夫婦ペアの相互作用や各々の精神的健康を考える際には、留意しておかなければならないことがある。親密な二者関係においては、一方が抱える困難や精神的健康が悪化すると、当該個人への影響だけでなく、その配偶者にも影響が及ぶからである。この個人間プロセスは、クロスオーバー効果（Westman、2001）と呼ばれ、共働き夫婦のストレスの解明に寄与している（伊藤・相良・池田、2006；加藤・金井、2007；黒澤・加藤、2014）。スピルオーバーとクロスオーバーに関する先行研究を概観した黒澤（2014）は、共働き夫婦のストレスをとらえるには、職場領域と家庭領域関係による個人へのスピルオーバーだけでなく、夫婦の一方が感じるスピルオーバーが他方の配偶者

に影響を及ぼすクロスオーバー効果についても検討する必要があると述べている。

これらの先行研究の指摘を、先の生態学的システム理論に基づいて考えると、父親の職場から家庭へのスピルオーバーが父親本人の精神的健康に影響する関係はメゾシステムの作用であり、母親や子どもの精神的健康にも関連するとすればエクソシステムの作用と考えられる。そこで本研究では、テレワークや在宅勤務により、通常以上に家庭に仕事が持ち込まれたコロナ禍における父母のストレスについて、職場と家庭双方向のネガティブおよびポジティブな面のスピルオーバーに着目し、父母個人と配偶者の精神的健康へのクロスオーバー効果を含めた関連を検討する。

次に、家庭というマイクロシステム内の相互作用の変化についての可能性を考える。家族システム論では、「母子関係」と「父子関係」に影響を与える「父母関係（コペアレンティング：coparenting）」が想定されている。コペアレンティングは、「親が親としての役割をどのように一緒に行うか、どのくらい親がもう一方の親の努力をサポートするか否か（Feinberg、2003）」と定義され、夫婦関係とは区別される（Cowan & McHale、1996）。加藤・黒澤・神谷（2014）は、わが国の夫婦間で行われるコペアレンティングを夫婦ペアレンティングと呼び、母親は父親に対して、支持・尊重・激励を中心とした「促進」、および、拒否・否定・非難を中心とした「批判」の調整行動を行っていること、母親からの「促進」の高さは、父親の子ども関与、育児協働感および夫婦関係満足の高さと関連し、「批判」の高さは、父親の関与、育児協働感や夫婦満足感の低さと関連することを示した（加藤ほか、2014）。コロナ禍における急激な社会状況の変化は、父母がともに子どもに向かうペアレンティングや相互調整行動とも相まって、父母それぞれの精神的健康に影響を与えているかもしれない。

以上を踏まえて、本研究は、新型コロナウイルス感染拡大の不安を受けた国家や社会レベルの急激な体制の変化（マクロシステム）により、普段とは大きく異なる日常を送ることになった子育て家族（マイクロシステム）における父親と母親の精神的健康と、それらに影響を与えていると想定される要因との関連を検討する。具体的には、父親と母親それぞれの精神的健康に対して、家庭と職場の関係（本人の職場の影響であればメゾシステム・配偶者の職場の影響であればエクソシステム）によるスピルオーバー、および夫婦２人で子育て行動を行うために母親が父親にむけて行う夫婦ペアレンティング調整行動（マイクロシステム）がそれぞれどのようにかかわっているのかについて、夫婦の相互影響関係（配偶者からのクロスオーバー効果）を含めて検討する。

なお、本調査結果に関して、コロナ禍を踏まえて検討するには、そもそも本データがコロナ前と比較してどの程度の得点水準を示しているのかを考慮する必要がある。そこで我々は、収集したデータの得点水準を、コロナウイルス感染拡大以前に同尺度項目を用いた先行研究結果と比較検討し、別稿にまとめた（神谷・加藤、2021）。それによれば、本データにおける夫婦ペアレンティング調整行動は、批判、促進ともにコロナ禍以前に比べて低かった。また、仕事と家庭間のポジティブ・スピルオーバーは父母ともにコロナ禍以前より低く、家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバーは、父親においてコロナ禍以前よりも高く、就労している妻でもより高いこと、精神的健康は、夫婦ともにコロナ禍以前（前年）よりも抑うつ・不安が高いが、緊急事態宣言が延長されることになった５月（本調査の前月）よりは低いことがわかった。加えて、在宅生活時間と子どもとの接触時間が、コロナ禍以前よりも全体として増加していたこともうかがえた。調査対象や調査時点の状況も異なり分析の限界もあるため、あくまで参考に留まるが、これらの点を踏まえつつ、以下、コロナ禍における関連要因の検討を報告することとする。

## 方　法

### 調査方法と調査対象者

本調査は、夫婦ペアを対象とすることおよび第一子の年齢を統制することが、重要な目的の一部であった。そこで、これらの条件を満たすために、（株）クロスマーケティングのリサーチ専門データベースに登録されたモニター（2020年10月時点で全国465万人登録）を対象としたオンライン調査を行った[1]。性別、子ども年齢の偏りを防ぐために、第一子年齢３群（３,４歳群、８,９歳群、13,14歳群）、子どもの性別２群について均等割り付けを行った。ただし、一般的にクリーニングの段階で若年層のデータ欠落が大きいことが予想されるため、３,４歳群を570組、８,９歳群と13,14歳群を315組と設定した。データの実査は、2020年６月８日から10日の間に行われ、結果、モニターベースで３,４歳群の父親が307名、母親が317名、８,９歳群で父親が172名、母親が175名、13,14歳群で父親が170名、母親が169名の計1310名であり、これらのモニターの配偶者データも含め、1310組のデータが収集された。これらのデータについて、(a) 第一子年齢や性別、家族構成などについて、夫婦間で回答が一

致していない、(b) 単一の回答が設問を超えて不自然に続くこと、などを基準にクリーニングを行い、最終的に904組（3, 4 歳群352組、8, 9 歳群276組、13,14歳群276組）のデータが分析対象となった（有効回答率69.0%）。分析には IBM SPSS Statistics 25を用いた。

フェイスシート情報は以下の通りである。母親年齢：23－56歳（$M$ =40.04、$SD$ =6.07）、父親年齢：24－69歳（$M$ =42.57、$SD$ =6.58）、父親の就労形態：フルタイム904名（100%）、母親の就労形態：フルタイム222名（24.6%）、パートタイム258名（28.5%）、フリーランス15名（1.7%）、未就労409名（45.2%）、結婚歴：1－30年（$M$ =11.22、$SD$ =4.94）、家族形態：核家族740名（81.9%）、多世代同居家族164名（18.1%）、子ども人数：1人472名（52.2%）、2人342名（37.8%）、3人79名（8.7%）、4人 7 名（0.8%）、5人 4 名（0.4%）であった。

### 調査内容

**仕事役割と家庭役割のスピルオーバー**　福丸（2003）の仕事役割と家庭役割のスピルオーバー尺度を用いた。「家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバー（ex. 家庭のことが気になって仕事に集中できない）」「仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバー（ex. 家事や育児よりももっと仕事をしたい）」「両役割間のポジティブ・スピルオーバー（ex. 仕事での経験が家庭でも活かされる）」の 3 下位尺度（いずれも 6 項目）から構成される。新型コロナウイルスによる活動自粛期間においてどの程度あてはまるかを「ちがう（1）―その通りである（5）」の 5 件法で回答を求めた。それぞれ合計し項目数で除した値を算出し、スピルオーバー得点とした。高得点であるほど、スピルオーバーが高いことを示す。なお、調査にあたって、原著者の許諾を得た上で、「仕事で疲れてしまい親役割が思うように果たせない」という項目を「仕事で疲れてしまい親としてやろうと思うことが思うように果たせない」といったように文言を一部修正した。内的整合性は、家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバーが父親で $\alpha$ =.92、母親で $\alpha$ =.90、仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバーが父親で $\alpha$ =.81、母親 $\alpha$ =.82、両役割間のポジティブ・スピルオーバーが父親で $\alpha$ =.89、母親で $\alpha$ =.90であった。

**夫婦ペアレンティング調整行動**　父親による育児関与に対して、母親がどのように対応し調整するのかを測定するために、夫婦ペアレンティング調整尺度（加藤ほか、2014）を用いて父親と母親の夫婦ペアから回答を得た。母親による父親の子育て行動への支持、尊重、激励を中心とした促進行動 9 項目（母親版 ex. 夫に相手をしてもらっていることで、子どもがとても喜んでいると夫に伝える）と、拒否、非難を中心とした批判行動7項目（父親版 ex. あなたを非難する）の 2 下位尺度から構成されており、「まったくない（1）―いつもある（6）」の 6 件法で回答を求めた。母親は自身が父親に向けてどの程度調整行動を行っているのか、父親は自身が母親からどの程度調整行動を受けているかを回答する。促進項目と批判項目は、それぞれ合計し項目数で除した値を算出し、促進得点および批判得点とした。内的整合性は、促進の母親回答で $\alpha$ =.94、父親回答で $\alpha$ =.94、批判の母親回答で $\alpha$ =.91、父親回答で $\alpha$ =.92。高得点であるほど、母親の促進あるいは批判が高いことを示す。

**精神的健康**　本研究では Kessler らにより開発された K6（Kessler et al.、2002）の日本語版を用いた（Furukawa et al.、2008）。過去 30 日間の精神的健康反応 6 項目について、「まったくない（0）―いつも（4）」の 5 件法で回答を求め。合計点が高いほど、不安・抑うつなどの精神的問題がより重い可能性があるとされている。内的整合性は、父親で $\alpha$ =.95、母親で $\alpha$ =.93であった。

**コロナ禍の子どもへの心配**　新型コロナウイルスによる活動自粛期間における子どもへの心配について、身体面、心理面・精神面、学習面（習い事を含む）、生活面、対人面の 5 項目について「ほとんどあてはまらない（1）―とてもあてはまる（5）」の 5 件法で回答を求めた。内的整合性は父親で $\alpha$ =.91、母親で $\alpha$ =.92であった。

**在宅時間および子どもとの接触時間の変化**　新型コロナウイルス感染拡大により活動自粛が開始される前と、活動自粛になった後における生活の様子について、平日 1 日あたりの在宅時間と子どもと接する時間の回答を求めた。在宅時間は、(a) 7 時間未満、(b) 7 時間以上11時間未満、(c) 11時間以上15時間未満、(d) 15時間以上19時間未満、(e) 19時間以上の 5 択、子どもとの接触時間は、(a) 30分未満、(b) 30分以上1時間未満、(c) 1 時間以上 3 時間未満、(d) 3 時間以上6時間未満、(e) 6 時間以上の 5 択であった。分析にあたっては、自粛前と後の回答から、在宅／接触時間が減少・変化なし群（1）と増加群（2）に割り当てた。

**フェイスシート**　回答者と配偶者の年齢、職業、就業形態、および結婚歴、家族形態、夫婦の居住形態、子どもについて（人数・年齢・性別）を尋ねた。

### 倫理的配慮

実施にあたり第一筆者の所属組織（当時）の研究倫理審査委員会による審査と承認を得た[2]。調査にあたって

は、回答画面の冒頭に、調査協力の依頼として調査の目的と回答方法、回答は途中で中断できること、収集されたデータは個人が特定されない形で公表されることを明記し、調査協力が得られた場合にのみ回答に進むようにした。

## 結　果

### 各変数の記述統計と精神的健康との単純相関

各変数の記述統計と精神的健康との相関係数を共働き家庭、専業主婦家庭ごとにTable1、Table2に示す。

変数ごとに精神的健康との単純相関を見てみると、母親の「在宅時間変化」が専業主婦家庭の父親と母親の精神的健康に極めて弱い相関、すなわち母親の在宅時間の変化の大きさと不安や抑うつの高さの関連を示した（順に $r$=.10、$p$<.05、$r$=.13、$p$<.01 ）。また、父母双方が回答した「子どもへの心配」は、共働き／専業主婦家庭のいずれにおいても、自身および配偶者の精神的健康との間に有意な正の関連、すなわち子どもへの心配の強さと不安や抑うつの高さの関連を示した。夫婦ペアレンティングでは、母親回答の「促進」並びに父親回答の「促進」が共働き／専業主婦家庭双方の父親の精神的健康と極めて弱い負の相関を示し、促進しているという母親の認識および促進されているという父親の認識の高さは父母それぞれの不安や抑うつの低さと関連することがわかった。そのほか、共働き家庭の父親回答の「促進」は母親の精神的健康とも負の相関を示し、促進されているという父親の認識の高さと母親の不安や抑うつの低さに関連がみられた。一方、父母双方が回答した「批判」は、共働き／専業主婦家庭のいずれにおいても、自身および配偶者の精神的健康との間に、ごく弱い、あるいは弱い相関を示し、批判しているという母親の認識および母親から批判されているという父親の認識はそれぞれの不安や抑うつの高さと関連していた。さらにスピルオーバーは、父母それぞれの「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」、「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」が、自身および配偶者の精神的健康と中程度から弱い相関を示した。すなわち父母いずれの場合のスピルオーバーであっても、また家庭から仕事か仕事から家庭かによらず、家庭と仕事間のネガティブなスピルオーバーの高さは父母双方の不安や抑うつの高さと関連した。

### 階層的重回帰分析による精神的健康との関連

共働き家庭、専業主婦家庭それぞれについて、父母各々の精神的健康と、コロナによる生活時間の変化、子どもの状態に関する心配、夫婦ペアレンティング、家庭と仕事の多重役割におけるスピルオーバーの関連を検討するために、階層的重回帰分析を行った。具体的には、「第一子年齢」を制御変数とした上で、ステップ１では、父親と母親それぞれの「在宅時間変化」、「子どもとの接触時間の変化」を投入し、緊急事態宣言を受けて家庭や子育て役割に割く時間に生じた変化と精神的健康の関連を確認する。次にステップ２において、父母の「子どもへの心配」を投入し、コロナ禍や休校措置という通常を異なる生活下での子どもの状態への心配との関連を確認する。ステップ３では、夫婦ペアレンティングにおける母親から父親に対する「促進」と「批判」を投入し、家庭というマイクロシステム内で子育てを行う父親と母親の相互作用と精神的健康の関連を検討する。最後にステップ４で、共働き家庭では父母双方の、専業主婦家庭では父親の仕事と家庭役割におけるスピルオーバーの３下位尺度を投入し、家庭領域と仕事領域の影響関係と自身の精神的健康との関連、ならびにパートナーの精神的健康とのクロスオーバー効果の関連を検討する。これらの変数はいずれも精神的健康との関連が予想されるが、マイクロシステムにおける生活時間の変化（ステップ１）から、母子、父子の二者関係における心理的変数（ステップ２）、ならびに、父母間におけるコペアレンティング（ステップ３）さらには、父母自身の職場と家庭の関係というメゾシステム、配偶者の職場との関係というエクソシステムといった（ステップ4）といったように、父母それぞれの生態学的な観点を拡張する視点から、順次階層的に投入する。このことで、他変数を統制した上での当該変数と精神的健康の関連が段階的に検討される。投入に際しては強制投入法を用いた。なお、すべての分析でVIFの値は、1.01―2.57の間を示した。

共働き家庭の結果では（Table3）、ステップ１における父親の重決定係数は有意傾向であり（$R^2$=.02、$p$=.08）、母親では有意であった（$R^2$=.03、$p$=.02）、ステップ２、３、４においては説明率の増分が有意であった（父親でステップ２: ⊿ $R^2$=.06、$p$<.001、ステップ３: ⊿ $R^2$=.08、$p$<.001、ステップ4: ⊿ $R^2$=.16、$p$<.001、母親でステップ２: ⊿ $R^2$=.05、$p$<.001、ステップ3: ⊿ $R^2$=.09、$p$<.001、ステップ４: ⊿ $R^2$=.13、$p$<.001）。

共働き家庭の父親の精神的健康について、各ステップで投入した独立変数についてみてみると、「第一子年齢」は、父親でステップ１から３まで有意であったが（順に $\beta$ =-.11、$p$<.05、-.11、$p$<.05、-.12、$p$<.01）、ステップ４では有意ではなかった。父親回答の「子どもとの接触時間の変化」は、ステップ２と３において有意であり（順に

Table1　各変数の記述統計

| | 共働き家庭 | | | | 専業主婦家庭 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 父親回答 | | 母親回答 | | 父親回答 | | 母親回答 | |
| | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* |
| 精神的健康 | 1.82 | 0.93 | 1.90 | 0.88 | 1.70 | 0.85 | 1.92 | 0.92 |
| 在宅時間の変化 | 1.35 | 0.48 | 1.39 | 0.49 | 1.39 | 0.49 | 1.28 | 0.45 |
| 子どもとの接触時間の変化 | 1.32 | 0.47 | 1.32 | 0.47 | 1.34 | 0.48 | 1.22 | 0.42 |
| 子どもへの心配 | 2.96 | 1.05 | 3.28 | 1.05 | 3.00 | 1.05 | 3.29 | 1.03 |
| CP促進 | 3.55 | 1.07 | 3.70 | 1.06 | 3.55 | 1.09 | 3.71 | 1.09 |
| CP批判 | 3.11 | 1.06 | 3.14 | 1.04 | 2.97 | 1.07 | 2.96 | 1.01 |
| 家庭→仕事NS | 2.27 | 0.91 | 2.58 | 0.92 | 2.11 | 0.87 | | |
| 両役割PS | 2.74 | 0.85 | 2.87 | 0.86 | 2.75 | 0.83 | | |
| 仕事→家庭NS | 2.78 | 0.74 | 2.88 | 0.75 | 2.75 | 0.77 | | |
| n | 495 | | 495 | | 409 | | 409 | |

注）CP：夫婦ペアレンティング，NS：ネガティブ・スピルオーバー，PS：ポジティブ・スピルオーバー

Table2　妻の就労状況ごとの父母の各尺度と精神的健康との相関係数

| | 共働き家庭 | | 専業主婦家庭 | |
|---|---|---|---|---|
| | 父親 | 母親 | 父親 | 母親 |
| 在宅時間の変化(父親) | .00 | .02 | .07 † | .04 |
| 子どもとの接触時間の変化(父親) | -.04 | -.07 † | .05 | .03 |
| 在宅時間の変化(母親) | .04 | .02 | .10 * | .13 ** |
| 子どもとの接触時間の変化(母親) | .01 | .03 | .01 | .00 |
| 子どもへの心配(父親) | .23 *** | .17 *** | .25 *** | .23 *** |
| 子どもへの心配(母親) | .17 *** | .18 *** | .22 *** | .29 *** |
| CP促進(母親) | -.11 ** | -.03 | -.11 * | -.02 |
| CP批判(母親) | .21 *** | .29 *** | .20 *** | .27 *** |
| CP促進(父親) | -.15 *** | -.11 ** | -.09 * | -.04 |
| CP批判(父親) | .26 *** | .28 *** | .23 *** | .28 *** |
| 家庭→仕事NS(父親) | .45 *** | .34 *** | .42 *** | .30 *** |
| 両役割PS(父親) | -.03 | .00 | .01 | .01 |
| 仕事→家庭NS(父親) | .35 *** | .22 *** | .30 *** | .20 *** |
| 家庭→仕事NS(母親) | .30 *** | .40 *** | | |
| 両役割PS(母親) | .06 | .05 | | |
| 仕事→家庭NS(母親) | .19 *** | .36 *** | | |
| n | 495 | 495 | 409 | 409 |

† $p<.10$,　* $p<.05$,　** $p<.01$,　*** $p<.001$

注）CP：夫婦ペアレンティング，NS：ネガティブ・スピルオーバー，PS：ポジティブ・スピルオーバー，（父親）：父親回答，（母親）：母親回答

Table3　共働き家庭の父母の精神的健康の階層的重回帰分析

| | 父親の精神的健康 | | | | 母親の精神的健康 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | Step1 | Step2 | Step3 | Step4 | Step1 | Step2 | Step3 | Step4 |
| 第一子年齢 | -.11 * | -.11 * | -.12 ** | -.03 | -.09 * | -.10 * | -.09 * | -.03 |
| 在宅時間変化(父親) | .02 | .01 | .02 | -.02 | .04 | .03 | .03 | .00 |
| 在宅時間変化(母親) | .04 | .02 | .03 | .03 | .04 | .02 | .02 | .03 |
| 子ども接触時間変化(父親) | -.09 | -.12 * | -.11 * | -.08 † | -.16 ** | -.18 *** | -.18 *** | -.17 *** |
| 子ども接触時間変化(母親) | -.04 | -.06 | -.07 | -.08 † | -.02 | -.04 | -.04 | -.06 |
| 子どもへの心配(父親) | | .19 ** | .20 *** | .05 | | .10 † | .10 † | .00 |
| 子どもへの心配(母親) | | .08 | .04 | .02 | | .15 * | .09 | .06 |
| CP促進(母親) | | | -.04 | -.04 | | | .07 | .07 |
| CP批判(母親) | | | .02 | -.06 | | | .14 * | .06 |
| CP促進(父親) | | | -.13 * | -.11 * | | | -.14 * | -.13 * |
| CP批判(父親) | | | .20 ** | .16 ** | | | .15 * | .11 † |
| 家庭→仕事NS (父親) | | | | .33 *** | | | | .19 *** |
| 両役割PS (父親) | | | | -.15 ** | | | | .02 |
| 仕事→家庭NS (父親) | | | | .19 *** | | | | -.03 |
| 家庭→仕事NS (母親) | | | | .09 | | | | .21 *** |
| 両役割PS (母親) | | | | .10 * | | | | -.07 |
| 仕事→家庭NS (母親) | | | | -.07 | | | | .16 ** |
| $R^2$ | .02 † | .08 *** | .16 *** | .31 *** | .03 * | .07 *** | .16 *** | .29 *** |
| $\Delta R^2$ | .02 † | .06 *** | .08 *** | .16 *** | .03 * | .05 *** | .09 *** | .13 *** |

注）CP：夫婦ペアレンティング，NS：ネガティブ・スピルオーバー，PS：ポジティブ・スピルオーバー，(父親)：父親回答，(母親)：母親回答

† $p<.10$，* $p<.05$，** $p<.01$，*** $p<.001$

Table4　専業主婦家庭の父母の精神的健康の階層的重回帰分析

| | 父親の精神的健康 | | | | 母親の精神的健康 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | Step1 | Step2 | Step3 | Step4 | Step1 | Step2 | Step3 | Step4 |
| 第一子年齢 | .02 | .02 | .00 | .05 | -.09 † | -.09 † | -.10 * | -.08 |
| 在宅時間変化(父親) | .03 | .00 | .00 | -.04 | .05 | .03 | .04 | .02 |
| 在宅時間変化(母親) | .09 † | .08 | .07 | .05 | .12 * | .11 * | .10 * | .09 † |
| 子ども接触時間変化(父親) | .01 | .01 | .01 | .03 | -.06 | -.06 | -.07 | -.05 |
| 子ども接触時間変化(母親) | -.01 | -.02 | -.03 | -.04 | .03 | .01 | -.02 | -.02 |
| 子どもへの心配(父親) | | .18 ** | .15 * | .04 | | .07 | .03 | -.04 |
| 子どもへの心配(母親) | | .10 | .11 † | .11 * | | .24 *** | .23 *** | .24 *** |
| CP促進(母親) | | | -.10 | -.09 | | | -.01 | .00 |
| CP批判(母親) | | | .04 | .07 | | | .09 | .11 † |
| CP促進(父親) | | | -.04 | -.03 | | | -.06 | -.06 |
| CP批判(父親) | | | .13 † | .02 | | | .16 * | .10 |
| 家庭→仕事NSO (父親) | | | | .36 *** | | | | .24 *** |
| 両役割PSO (父親) | | | | -.11 * | | | | -.08 |
| 仕事→家庭NSO (父親) | | | | .15 ** | | | | .03 |
| $R^2$ | .01 | .07 *** | .12 *** | .26 *** | .03 † | .11 *** | .17 *** | .22 *** |
| $\Delta R^2$ | .01 | .06 *** | .05 *** | .14 *** | .03 † | .08 *** | .06 *** | .05 *** |

注）CP：夫婦ペアレンティング，NS：ネガティブ・スピルオーバー，PS：ポジティブ・スピルオーバー，(父親)：父親回答，(母親)：母親回答

† $p<.10$，* $p<.05$，** $p<.01$，*** $p<.001$

$\beta$ = -.12、$\beta$ = -.11、ともに $p$<.05)、ステップ4では有意傾向であった（$\beta$ = -.08、$p$<.10、）。母親回答の「子どもとの接触時間の変化」は、ステップ4においてのみ有意傾向であった（（$\beta$ = -.08、$p$<.10）。父親回答の「子どもへの心配」が、ステップ2から3において有意であったが（順に $\beta$ =.19、$p$<.01、$\beta$ =.20、$p$<.001）、ステップ4では有意ではなくなっていた（$\beta$ =.05、*n.s.*）。また、父親回答の「促進」と「批判」はステップ3と4で有意であった（ステップ順に「促進」で、$\beta$ =.-.13、$\beta$ =-.11、ともに $p$<.05、「批判」で $\beta$ =.20、$\beta$ =.16、ともに $p$<.01）。さらに、ステップ3から4の説明率の増分は他の増分よりも高く、ステップ4では、父親回答の「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」（$\beta$ =.33、$p$<.001）「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」（$\beta$ =.19、$p$<.001）、「両役割のポジティブ・スピルオーバー」（$\beta$ =-.15、$p$<.01）と母親回答の「両役割のスピルオーバー」（$\beta$ =.10、$p$<.05）が有意であった。

共働き家庭の母親の精神的健康については、「第一子年齢」がステップ1から3で有意であったが（順に $\beta$ =-.09、-.10、-.09、すべて $p$<.05)、ステップ4では有意ではなかった。父親回答の「子どもとの接触時間の変化」がすべてのステップで有意であったほか（順に $\beta$ =-.16、$p$<.01、$\beta$ =-.18、$p$<.001、$\beta$ =-.18、$p$<.001、$\beta$ =-.17、$p$<.001）、父親自身の「子どもへの心配」はステップ2と3で有意傾向だが（共に $\beta$ =.10、$p$<.10）、ステップ4では有意ではなくなっていた（$\beta$ =.00、*n.s.*）。また、母親自身の「子どもへの心配」が、ステップ2においてのみ有意であった（$\beta$ =.-.15、$p$<.05）。さらに、ステップ3と4で夫婦ペアレンティングの父親回答の「促進」と「批判」が有意あるいは有意傾向であり（「促進」でステップ3: $\beta$ =.-.14、$p$<.05、ステップ4: $\beta$ =.-.13、$p$<.05、「批判」でステップ3: $\beta$ =.15、$p$<.05、ステップ4: $\beta$ =.11、$p$<.10）、ステップ3でのみ母親の「批判」も有意であった（$\beta$ =.14、$p$<.05）。ステップ4で加えた多重役割のスピルオーバーについては、父親と母親回答の「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」（父親で $\beta$ =.19、$p$<.001、母親で $\beta$ =.21、p<.001）ならびに母親回答の「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」が有意であった（$\beta$ =.16、$p$<.001）。

専業主婦家庭の結果（Table4）では、共働き家庭と異なり、父母ともにステップ1における重決定係数は5％水準で有意ではなかったが（父親で $R^2$=.01、$p$=.53、母親で $R^2$=.03、$p$=.06）、ステップ2、3、4において説明率の増分が有意であった（父親でステップ2: ⊿ $R^2$=.06、$p$<.001、ステップ3: ⊿ $R^2$=.05、$p$<.001、ステップ4: ⊿ $R^2$=.14、$p$<.001、母親でステップ2: ⊿ $R^2$=.08、$p$<.001、ステップ3: ⊿ $R^2$=.06、$p$<.001、ステップ4: ⊿ $R^2$=.05、$p$<.001）。

専業主婦家庭の父親の精神的健康について、投入した変数との関連を見ると、「第一子年齢」は父親の精神的健康との間に有意な関連はみられなかった。次に、ステップ1でのみ母親自身の「在宅時間の変化」が有意傾向を示すとともに（$\beta$ =.09、$p$<.10）、ステップ2と3で父親自身の「子どもへの心配」が有意であったが（順に $\beta$ =.18、$p$<.01、$\beta$ =.15、$p$<.05）、ステップ4では有意ではなかった（$\beta$ =.04、*n.s.*）。また、夫婦ペアレンティングに関する変数は、ステップ3で父親回答の「批判」が有意傾向であった（$\beta$ =.13、$p$<.10）以外は有意な関連を示さなかった。さらに、ステップ4における父親回答の多重役割は、「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」、「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」、および「両役割のポジティブ・スピルオーバー」が有意であった（順に $\beta$ =.36、$p$<.001、$\beta$ =.15、$p$<.01、$\beta$ =-.11、$p$<.05）。

一方、専業主婦家庭の母親の精神的健康については、「第一子年齢」がステップ1、2で有意傾向であり（ともに $\beta$ =-.09、$p$<.10）、ステップ3では有意であった（$\beta$ =-.10、$p$<.05）。次に、ステップ1から4にかけて母親自身の「在宅時間の変化」が極めて低い係数ではあるものの有意、あるいは有意傾向であったほか（ステップ1: $\beta$ =.12、$p$<.05、ステップ2: $\beta$ =.11、$p$<.05、ステップ3: $\beta$ =.10、$p$<.05、ステップ4: $\beta$ =.09、$p$<.10）、母自身答の「子どもへの心配」もステップ2から4すべてで有意であった（ステップ2: $\beta$ =.24、ステップ3: $\beta$ =.23、ステップ4: $\beta$ =.24、すべて $p$<.001）。また、夫婦ペアレンティングは、ステップ3で父親回答の「批判」が有意（$\beta$ =.16、$p$<.05）、ステップ4で母親回答の「批判」が有意傾向であった（$\beta$ =.11、$p$<.10）。多重役割間のスピルオーバーは、ステップ4で父親回答の「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」が有意であった（$\beta$ =.24、$p$<.001）。

## 考　察

新型コロナウイルス感染拡大による大規模で急激な行動自粛規制という出来事を受けて、子育て家庭の親の精神的健康はいかなる状況におかれたかについて、本研究は生態学的多水準システムから想定された要因との関連の検討を試みた。具体的には、マイクロシステムにおける夫婦ペアレンティング調整行動、メゾシステムおよび

エクソシステムレベルにおける家庭役割と仕事役割のスピルオーバーに着目し、子育て家庭の夫婦ペアを対象として、第１回目の緊急事態宣言解除直後の2020年６月初旬に、行動自粛期間を振り返って回答を求めた。その結果、共働き／専業主婦家庭における父母の精神的健康度の分散の説明率は、各システムを想定して本調査が用意した変数の階層的な投入により、いずれの段階においても有意に増加した。

共働き家庭の父親の精神的健康をみると（Table3）、家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー、仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが高いほど、両役割のポジティブ・スピルオーバーが低いほど、精神的健康は低いという関連がみられ、いずれもメゾシステムにあたる家庭と仕事役割双方の葛藤状態が重要な関連要因であることが示された。このことは、在宅勤務等による在宅時間増加により、父親の家庭役割と仕事役割がともに同じ生活空間の中で求められるという、通常とは異なる体験を背景として考えた方がよいだろう。ただし、父親回答の子どもとの接触時間の増加は父親の精神的健康の高さと関連が見られていることから、在宅時間の変化が子育て関与の増加につながるならば、精神的健康につながると考えられる。その一方で、夫婦ペアレンティングを投入した結果では，父親が母親から子どもへの関与について批判されるという認識が高いほど，父親の精神的健康が低いという関連を示していた。先行研究では、父親の子育て関与に対する母親からの批判が高いほど、子育ての協働感や夫婦関係満足感は低いことが確認されている（加藤ほか、2014）。これらを踏まえると、家庭内に仕事空間が持ち込まれる際には、家庭と仕事の役割葛藤に加えて、子育てをめぐる父母のやりとりや夫婦関係の満足感とも相互に関連し合うことに注意を払う必要があろう。なお、母親における両役割のポジティブ・スピルオーバーから父親の精神的健康へのクロスオーバー効果（エクソシステム）は、有意ではあるもののその値は極めて低いため、積極的な解釈は難しいと思われた。

一方、共働き家庭の母親の精神的健康をみると（Table3）、行動自粛の中、父親回答の子ども接触時間の増加が母親の精神的健康の高さと関連している。先に述べたように、子どもにかかわる時間が増えたと回答した父親自身も、精神的健康はより高い。この点については、父子の接触時間が増えるということが父母双方にとってより良好な精神状態につながるという面と、父母双方にとって良好な精神状態であることが父子の接触時間の増加につながるという面が考えられよう。また、母親自身が家庭から仕事および仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー（メゾシステム）を感じるほど、自身の精神的健康は低かった。共働き家庭において、家庭が生活に加えて仕事空間となることは、母親においても同様に困難な変化であり、母親自身の仕事と家庭の両役割葛藤が精神的健康と関連するという結果は理解しやすい。ところが母親においては、自身のスピルオーバーに加えて、父親が回答した家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバーが高いほどおよび母親からの促進が低いほど、母親の精神的健康が低いというクロスオーバー効果が確認された。このことから、母親の場合は、自分自身が感じる心理的ストレスに加えて、父親が感じているストレスとの関連も無視できないことがわかる。

ところで、子育て中の夫婦共働き家庭を対象とした先行研究（福丸、2000）では、父母ともに、仕事役割から家庭役割のネガティブ・スピルオーバーと両役割間のポジティブ・スピルオーバーが父母それぞれの抑うつ度と関連していたが、家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバーは抑うつ度と有意な関連をみなかった。20年ほど前の研究であり社会経済状況も含め単なるコロナ禍の事前事後比較として把握するのは難しいが、今回特に家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバーが精神的健康に関連していたことについては、ステイ・ホームによる子育て家庭ならではの背景ではないかと考えられる。

専業主婦家庭の父親の精神的健康をみると（Table4）、家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー、仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが高いほどおよび両役割のポジティブ・スピルオーバーが低いほど（メゾシステム）、精神的健康は低いという関連を示した。この点は共働き家庭の父親と同様の結果あった。一方、夫婦ペアレンティング（マイクロシステム）と精神的健康の間に有意な関連は認めなかった。

専業主婦家庭の母親の精神的健康（Table4）は、母親回答による子どもに関する心配の高さ、自粛後の在宅時間と関連していた。子どもの心配は、共働き家庭の母親や共働き／専業家庭の父親においてはステップ３までは有意な関連を見せているが、ステップ4における仕事と家庭のスピルオーバーの投入により有意ではなくなっている。共働き家庭や父親においては、メゾシステムあるいはエクソシステムにあたる家庭と仕事の関係が看過できない関連要因であるのに対し、専業主婦の母親の生活空間においては、子どもが占める比重が大きいことが反映されたのではないかと推察された。また、在宅時間増加との関連については、自粛によって家庭外で過ごしていた時間が確保できなくなり、相対的に家庭に拘束され

るようになった状況が考えられる。これらはいずれも、専業主婦家庭の母親に特徴的な結果であった。夫婦ペアレンティングにおいて有意な関連を認めなかった点は、父親側の回答結果と同様であった。なお、父親の認知する家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバーが、母親の精神的健康と関連するというクロスオーバー効果が認められており、この点は、共働きの母親と同様の結果が見られている。何故、共働き／専業主婦家庭にかかわらず、家庭のストレスが仕事に影響するという父親の認知が高いほど、母親の精神的健康が低いのかという点については、今後も引き続き検討を続ける必要がある。その際、父親の認知する家庭から仕事へのネガティブなスピルオーバーを受けて母親の精神的健康が低下するのか、あるいは母親の精神的健康の低さが父親の家庭領域で抱えるストレスとなり仕事にネガティブな影響を及ぼすのか、そのいずれの可能性についても考慮する必要があろう。

総じて、子育て夫婦の精神的健康は、夫婦関係や親子関係など、マイクロシステムレベルだけの問題ではないことが明らかとなった。新型コロナウイルス感染拡大を受けたマクロレベルの行動制限と自粛措置は、子育て家庭に関わるエクソシステム、メゾシステム、マイクロシステムの変化を招き、多水準システム間で相互に関連し合うことを考慮する必要があると言える。

### 今後の課題

本研究は、理論的な枠組みにとどまりがちな生態学的システム理論に依拠し、幼児から青年期前期までの幅広い子育て期の父母ペアを対象として、子育てを担う父母の精神的健康と各システムの候補要因の関連を実証的に示したことに意義がある。しかし、生態学的要因空間の広さ故､候補となる関連要因の選定が単純化されたこと、得られた標準偏回帰係数は、有意ではあっても積極的な解釈に十分な値とは言えず、今後の研究に向けた視点の提案にとどまったなど、残された課題は多い。

まず、精神的健康の関連要因候補の変数は必ずしも十分ではなく、特に専業主婦家庭の妻の日常的行動空間を十分に取り上げることができなかった。このことは、専業主婦家庭の母親におけるステップ４の説明率が、父親や共働き家庭の父母の増分に比べると低く抑えられたことからもわかる。つまり本研究は、メゾシステムとエクソシステムの影響に関して、仕事をもつ者については一定の説明を可能にしたが、仕事をもたない者の日常行動空間を十分に描くことができなかった。例えば、日常生活には、趣味、ボランティア、交友関係等、仕事以外の豊富な行動が存在する。今後の研究は、行動自粛がそうした行動群に制限を与えた影響にも目を向ける必要があるだろう。

２点目に、子育ての様相や親にかかる負担は子どもの発達段階により変化し一様ではない。本調査は、多水準レベルの要因関係を描くことを主要な目的としたために、子ども要因については「子どもへの心配」による極めて大まかな把握にとどまった。発達段階ごとの子ども要因を念頭に、各子育て時期の親の精神的健康に与える影響を記述することが求められる。また、養育者の抑うつ症状が子どもに対する感応性や適切な親子相互作用に支障を与えることは多くの研究結果が示している（Coyne et al、2007他）。今後は、本研究が示した要因が子どもの精神状態とどのように関連するのかも考えていく必要がある。

最後に、新型コロナウイルス感染拡大の影響として本研究が描いたのは、第１回緊急事態宣言を受けた行動自粛下の子育て家庭の様相であった。これに対して、第一回緊急事態宣言解除後も感染リスクは解消しておらず、後続の新たな局面への適応に対する模索は続いている。もしも養育者の抑うつ状態が慢性化すれば、養育に関する感応性はさらに阻害されることも考えられる（Cambell et al、1995）。今後、各システムレベルが個人の発達や適応に如何なる影響を与えていくのかについては、時間経過に伴う文化変容等のクロノシステムも含めて検討する必要があるだろう。

## 利益相反について

利益相反に関する開示事項はありません。

## 引用文献


朝日新聞社（2020）.（フォーラム）おうちワーク＆育児 . 朝日新聞 , 2020年４月26日（朝刊）, 7.

Bronfenbrenner, U.（1977）. Toward of experimental ecology of human development, *American Psychologist,* 32, 513-531. doi.org/10.1037/0003-066X.32.7.513

Bronfenbrenner, U.（1979）. The ecology of human development: Experiments by nature and design. Mass: Harvard University Press.

（ブロンフェンブレンナー , U. 磯貝芳郎（訳）（1996）. 人間発達の生態学――発達心理学への挑戦――川島書店）

Campbell, S. B., Cohn, J. F., & Meyers, T.（1995）.

Depression in first-time mothers: Mother-infant interaction and depression chronicity. *Developmental Psychology*, 31 (3) , 349–357. doi.org/10.1037/0012-1649.31.3.349.

Cowan, P. A., & McHale, J. P. (1996) . Coparenting in a family context: Emerging achievements, current dilemmas, and future directions. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 74, 93-106. doi.org/10.1002/cd.23219967408Crouter, A. C, (1984) . Spillover from family to work: The neglected side of the work-family interface. Human Relations, 37, 425-441. doi.org/10.1177/001872678403700601

Coyne, L.W., Low, C. M., Miller, A. L., Seifer, R., & Dickstein, S. (2007) . Mothers' empathic understanding of their toddlers: Associations with maternal depressions and sensitivity. *Journal of Child and Family Studies,* 16 (4) , 483-497. doi.org/10.1007/s10826-006-9099-9

Feinberg, M. E. (2003) . The internal structure and ecological context of coparenting: A framework for research and intervention. *Parenting: Science and Practice*, 3, 95-131. doi.org/10.1207/S15327922PAR0302_01

福丸由佳 (2000) . 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連 . 家族心理学研究 , 14, 151-162.

福丸由佳 (2003) . 父親の仕事と家庭の多重役割と抑うつ度 ――妻の就業の有無における比較――. 家族心理学研究 , 17, 97-110.

Furukawa,T.A., Kawakami,N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., …Kikkawa, T. (2008) . The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, 17, 152-158. doi.org/10.1002/mpr.257

原　泰史・今川智美・大塚英美・岡嶋裕子・神吉直人・工藤秀雄…HR 総研 (2020) . 新型コロナウイルス感染症への組織対応に関する緊急調査：第一報　一橋大学イノベーション研究センター .

伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2006) . 職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討 . 発達心理学研究, 17, 62-72. doi.org/ 10.11201/jjdp.17.62

神谷哲司・加藤道代 (2021) . 新型コロナウイルスの感染拡大に伴う子育て夫婦の生活状況の変化 ―生態学的な多水準システムの視点から―. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 , 70 (1) , 63-77.

加藤容子・金井篤子 (2007) . 共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト：「クロスオーバー効果」と「対処行動の媒介・緩衝効果」の吟味 . 産業・組織心理学研究, 20, 15-25. doi.org/ 10.32222/jaiop.20.2_15

加藤道代・黒澤　泰・神谷哲司 (2014) . 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討 . 心理学研究, 84, 566-575. doi.org/10.4992/jjpsy.84.566

Kessler, R.C., Andrews, G., Colpe, L.J., Hiripi, E., Mroczek, D.K., Normand, S.L.,Zaslavsky, A.M. (2002) . Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non - specific psychological distress. *Psychological Medicine*,32,959–976. doi.org/10.1017/S0033291702006074

小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則 (2001) . 児童を持つ共働き夫婦における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー : 抑うつ , 夫婦関係 , 子育てストレスに及ぼす影響 . 精神保健研究 , 14, 65-75.

黒澤　泰 (2014) . 仕事と家庭の相互影響下における夫婦二者間コーピング . 風間書房 .

黒澤　泰・加藤　道代 (2014) . 子育て期夫婦における関係焦点型コーピングの本人効果と配偶者効果の検討. 東北大学大学院教育学研究科年報 , 62, 103-117.

高橋美佐子 (2020) . 新型コロナステイホーム, 担い手たちの悲鳴　過重なストレス, 身体の不調訴える女性も . 朝日新聞 2020年5月14日 (朝刊) , 18.

Westman, M. (2001) . Stress and strain crossover. *Human Relations*, 54 (6) , 717-751.

## 脚　注

1　ネット調査でペア回答を求めるにあたり、なりすまし回答防止への対策として、(a) 調査依頼として、「配偶者への質問と回答は見ないこと」「代理でなく本人が答えること」「相談や意見交換をおこなわない」を明示する、(b) 父親から母親、あるいは母親から父親への回答交替の際には交替を示し、途中保存を可能とする、(c) 先に回答した性別、交替後の性別が同じデータは分析対象外とする、(d) 交替後の全ての質問画面に「母親 (父親) の方が回答してください」と表示することによって、随時注意喚起を行った。

2　承認 ID：20-1-005

## コロナ禍の夫婦の子育てと精神的健康
## ―生態学的多水準システムを視野に入れて―

本研究は、コロナ禍における父親と母親の精神的健康とその関連要因について、生態学的観点（Bronfenbrenner, 1979）に依拠した検討を試みた。生態学的な各システムとして、家庭と仕事のスピルオーバー、夫婦ペアレンティング調整行動に着目し、父母自身の精神的健康との関連を検討した。2020年6月初旬にインターネット調査を実施し、子育て家庭の夫婦904組を分析対象とした。その結果、共働き／専業主婦家庭における父母の精神的健康度の分散の説明率は、各システムを想定して本調査が用意した変数を階層的に投入したことにより、いずれの段階においても有意に増加した。特に、父親の家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバーは父親自身と母親の双方の精神的健康と関連しており、父親の就労状況が子育て夫婦の双方に影響を与える可能性が示されたことは、コロナ禍における在宅勤務等による在宅時間の増加を背景として考えることができよう。総じて、コロナ禍の行動制限措置による子育て夫婦の精神的健康は、子育て家庭をとりまく多水準の生態学的システムの相互関連を含めて考えることが必要である。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、生態学的システム、家庭と仕事間のスピルオーバー、
夫婦ペアレンティング、精神的健康

## Child rearing by married couples during the COVID-19 pandemic viewed through ecological systems theory.

In this study, for each ecological system based on Bronfenbrenner's theory (1979), we focused on the spillover between home and work and coparenting regulatory behavior, and we examined the association with couples' mental health. Data on 904 married couples in three groups of first-child ages (3–4, 8–9 and 13–14 years) were collected in early June 2020 through an internet survey. The results showed that, in both dual-earner and full-time housewife families, negative spillover from the father's home to work not only associated with the father's own mental health but also that of mother. It is suggested that the father's employment difficulties had an impact on both dual-earner families and full-time stay-at-home parent families.

Key words: COVID-19, ecological systems, spillover between home and work, coparenting, mental health